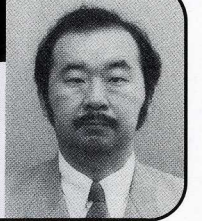


# 中欧の分裂と統合

## — マサリクとチェコスロヴァキアの建国

自著を語る①



法学部国際関係講座 ◆ 林 忠行

この小著で私は、チェコ人の哲学者で、チェコスロヴァキア初代大統領だったトマーシュ・ガリグ・マサリクの生涯をたどりながら、チェコという土地の歴史、とくにチェコスロヴァキア国家の形成過程を描こうとした。前半では、ハプスブルク帝国の版図のなかでチェコ人の歴史を追いつつ、マサリクが「チェコ人」としてのアイデンティティを獲得する過程をながめ、後半ではマサリクを指導者とする第一次世界大戦期のチェコスロヴァキア独立運動の展開を、当時の国際関係のなかで追った。

私は、いわゆる「外交史」という分野で教育を受け、また現在にいたるまでそこを主な研究領域としている。したがって、私の研究は、この小著の後半で述べられた問題を出発点としている。しかし、第一次世界大戦期の独立運動および独立以後のチェコスロヴァキア外交をたどる作業を続けながら、その外交を担ったマサリクや、本書でも多少触れたエドヴァルト・ベネシュという人物の世界観といった問題にこだわりの、結局、マサリクの生い立ちを調べることになってしまった。また、第一次世界大戦以後、今日にいたる中・東欧国際関係を、国家と国家の関係、もしくは政府と政府の関係という古典的な「外交史」という枠組みだけでとらえることはおよそできない。多様な言語、宗教、文化などを抱え込むこの地域、もしくは社会そのものを問題とせざるをえないからである。そうした私のこだわりや問題意識から生まれたのが、前半部分ということになる。しかしながら、あらためて読み直すと、十九世紀の中欧における言語やエスニシティという問題に焦点をおく前半と、外交史的な視角から第一次世界大戦やロシア革命、対ソ干渉戦争を視野にいたる後半の接合には少し無理があつたかもしれない。これまでにいただいた感想のなかには「前半はよかつたが、後半はたいくつだった」とか、その逆だったという反応がいくつかあつたからである。

後半でも、第一次世界大戦下のチェコ人の社会の変化や、そこでの人々の意識の問題が前半と同じ視角からもつと述べられていけば、そうした印象を与えることは避けられたのかもしれない。しかし、新書というスペースの制約もあり、しかもマサリクという個人の行動をたどるといふ形式をとつていたので、あまり欲張ることもできなかった。この小著では、思想家としてのマサリクについても、ごく断片的に触れただけで、その思想の内容に踏み込むことはできなかった。これは紙幅の制約もさることながら、何よりも私自身にまだそれだけの準備ができていないということによる。ともかくも、新書という一般の広い読者を対象とする出版形式で、マサリクという人物の生涯、その生まれ育つた土地の歴史、そしてあえていえば「近代」から「現代」へといたる中欧という世界の変容を、ひとつの「物語」としてまとめあげようとするこの試みは、これまでの中・東欧に関する読み物とは、多少なりと違う世界を紹介できたかもしれない。また、こうした自分の「専門分野」をかなり越えた広い視野での作業は、これまでの自分の仕事を考えなおすうえでも有益だった。中欧ないし東欧における「地域」と「国家」と「民族」の関係をもう少し理論的にとらえようとするこれからの私の課題の輪郭が、おぼろげながらも、この作品をとおして見えてきたように思えるからである。

林 忠行「中欧の分裂と統合」

(中公新書 七二〇円)

(はやし・ただゆき)

- ▼ 本誌は依頼原稿、投稿原稿、取材原稿の三種から成り立っています。原稿は個人のひばりや中傷を行うものでないかぎり、原則として採用しますので、積極的な投稿をお待ちします。
- ▼ 原稿は、なるだけMS-DOSのテキストファイルで記入したフロッピーディスクとベタ打ちハードコピーの提出をお願いします。詳細は各部署の広報委員にお尋ね下さい。
- ▼ 学生のワープロ普及率が低いので、学生の投稿原稿は手書きでも構いません。
- ▼ 匿名原稿の場合は、「学内便 広報委員会宛」として各部署の庶務係に提出して下さい。FAXでの投稿は082-242-11561にお願いたします。
- ▼ 投稿および依頼原稿の内容に関しては、広報委員会は責任を負いません。原稿の採否の決定は広報委員会で行います。従って掲載責任は広報委員会にあります。
- ▼ 原稿の締切は発行予定日の三十日前とします。次号は十二月十五日発行予定で、原稿締切は十一月十五日(月)です。固定モニターの方もこの日までにご意見をお寄せください。
- ▼ 本号に対する意見や批判、要望や提案など自由な投稿を期待しています。特に学生からの意見を待っています。